

荒波乗り越え

コバリキ (新潟市中央区)

■ 1 ■

大陸との交易に起源

創業100余年のコバリキ(新潟市中央区)は、建築内装や外構、ポンプの設置工事など建設業を主力とする。草創期には新潟と大陸とを行き来する海上輸送で中心的な役割を担い、歴代経営者らは戦中戦後とダイナミックな発想を基に幅広い事業を手掛けてきた。時に事業撤退という厳

時代にともに
にいがた企業
Niigata ヒストリー

しい決断を迫られながら、時代の荒波を乗り越えてパトンを受け継いでいる。

× ×

コバリキの前身「小林力三商店」の創業は1913(大正2)年と伝わる。創業者は現在のコバリキ社長、小林建氏(60)の曾祖父に当たる小林力三氏だ。

力三氏は、父が東京・浅草

撫順炭特約店として独立

で鍼灸師として働いていた酒、海産物を運び、旅客も乗った新潟運送という会社があった。力三氏は98(明治31)年に入社。その後、同社は南満州鉄道(満鉄)の子会社として運航業務を請け負うようになり、大豆などを輸送

16歳になった力三氏は、家計を支えるため新潟町の回船問屋へ見習い奉公に出る。そこで得た経験を武器に運送業界を渡り歩く。かつて北海道・小樽と新潟、大阪を結ぶ航路で米や



自社の看板の前に立つ2代目・小林力三氏。大連汽船の代理店業務を受け継いで事業を急成長させた1935年ごろ、新潟市

炭鉱を経営し、石炭を満州内に輸送した。鉱山は鉄道に次ぐ満鉄の事業の柱になっていた。

「新たに撫順炭鉱の石炭を取り扱わないか。力三氏が専務を務めていた新潟運送に、満鉄側からそんな誘いがあった。」

だが、新潟運送は既に三菱系の鉱山会社と石炭を取引する関係であり、当時の商慣習として商売がかぶるわけにはいかなかった。

力三氏は「それならば」と、独立して自ら撫順炭の特約店を開く道を選ぶ。こうして設立されたのが、小林力三商店だった。県内で撫順炭の輸入販売を行ったほか、大連汽船の代理店業務や港荷役なども一手に引き受けた。やがて満鉄の新潟の拠点といえる存在に育っていく。

新潟港は水深の浅さが難点だったが、1926(大正15)

年に築港工事が完了し、大型船の接岸が可能になった。「さあこれから」という時、商店は大きな転機を迎える。30年、力三氏が胃がんにより63歳で急逝したのだ。

力三氏は長男と次男を病で失っており、当時23歳で肺病による療養生活を終えたばかりの三男・良介氏だけが残されていた。

いきなりトップに就くことになった良介氏は「本当にまいった。受け継がなければ食っていけない」と後年、新潟日報のインタビューで振り返っている。

良介氏は、父が取引先から得ていた信用を継承したいと、2代目「力三」を襲名。30人ほどの従業員とともに奮闘する。

ちやうど扱う貨物量が膨張した時期でもあった。撫順炭に加え、鋼材も輸入。32年の満州国建設で沸く現地に向け、新潟から建設資材などを船積みした。

2代目力三氏が「新潟港に毎月3回入る大連汽船の5千トンの船腹が常に満腹だった」と語るほど荷動きが活発だった。「時代の波に乗って事業を拡大できた。憧れとともに嫉妬を感じます」。建氏は、右肩上がりで業績を伸ばした当時をうらやむ。

日米開戦後、太平洋側が敵艦の集中砲撃を受けるようになる。新潟港の重要性がさらに増していく。

創業	1913年
資本金	5000万円
事業内容	建設資機材の販売、 施工
売上高	約22億円 (2020年9月期)
従業員数	39人(契約社員含む)

会社データ